



特別
6590
17



5
6590
17

弘化四歲 丁未 孟春

十回垂下

土佐城東白蓮社 松一編

小序

時てい過世ハ再及己難
一多むを悟其六抱とてせせさるあはれ
あつて理ありとて名を必解を掲ぐといふも今
思ふありぬこと——東海林名人松二子字年
の影は信一ハ彼を胡まふ二の松以極て下
ふ以縁せしふ似よといふも天終るを——丁固く八
公の業は始を帝の雨と歸肅宗帝の唐乃



祚無せし木の思と云々——君をやくらり 仙階
此道も遊りて和風の浦も多豆の秘伝の書
のふく玉川の源流探りし——此初陳をたふ
昔公益のひはの江に松——くらくらりわらわら
思ひ浪迷の儘き——散れ暖味の葉様——
——三井の讀み守の樂と作り 辛味のおも
雨の細くは知らぬ位庵の古跡も風花のひま
将伊勢のまきま指——てまや鈴川の心とすき

二見の貝拾ひて書あつきのまな感——
篠風庵の案もあつて切つ積通樂音
松の二巻——縹色をくそし此道と極度せ——
車人皆ちまきまらり——るの白蓮社中にも
の因浅く——は一句の秘伝のなつりしを諸風
士代読章——読く一小冊——様もよき
蕉門の寫字紙はくせし知り——めんとせし是
再至の時松の名はむら——うらんとせしあはれ

無書菴

貫三誌

千代抄

其本れり。

若みやう



東海林の生とて性温和馬実
一て能く善く勤を以て人乃
文の如く廣 公の徳業は
業ありて正風の道と學
遠く交滌風俗解りて
謂て學せしれり
重剛不還の位者成と
誰か其の所りて

還るの書くは
糸歌の字并乃未せふ事

此祝

春秋菴

二園石

笑屠りく千区りや松の花

ととらを養長光の酒松二

笑眉を新糸人よをらきて 璞高

遠近通ふるの羽煙より 昇六

横雲のををるるの残る月 里伯

高は抱えて足穂 傾く 艸化

遠織仕舞下るるの取の次 亀涛

折る一帯末の厚腐 賒 和糸

儂く此處の中客の糸隣 一亭

珠緒を穿く波の堂の証 松石

日しく暑の幕の土崩前 東澁

月のゆ原をるるの了文 市隱

久し振旦ひもつける 變化粧 一貫
 懸粧のめれまを 濁しぬ 椿風
 生粧の何事合や 子持つきて 茂竹
 紫乃わらふ 帰る 番祿宣 三巴
 昔しのお業や 子代の 極也 楽 貫三
 玉殿深めえ 昇る 日の 義 二柳
 や 海を 渡り 出ぬ の 飯 煙 芥水
 子よ入の 緋青 磁 珊瑚珠 鹿二

同波のさへ 霞を 巻 舞 一 せい
 ひよ 懐け ぬ 糸 舞 一 せい
 空の 梅雪乃 中々 香 白ひ 翠江
 張ひつゝ 二年の 市人 欽古

右歌仙行一唱

社家の祝詞と云々

禱す事よ南無法橋

はらやれ衣装のむらや初礼者 芥水

さう濯くまふとくさ着和布袈 飲吉

目くぬく幾竹の色や松の花 市隱

松松年経る山の笑ひいふ 三巴

晴ま〜あけ〜あけ〜あけ〜山梅 一亭

春の雨をひて廻る梢の柳 一貫

席争ふ事あ〜や初は〜 松石

浪色ふ来てま宮やぬ〜水 亀濤

福引ふ早報〜く〜や赤門同士 和園

木陰をて〜の思や籠子の声 昇六

柿咲て〜海〜運ふ事あ〜を申 里仙

林道やと〜く〜越ん呼子や 東澁

常路友遊ひ自在や花の山 茂竹

そ〜風や柳の枝〜〜ゆ〜ふと 鹿二

皇統て休み望遠の空雀井
松山泉のむらあつるを見ら
草の身成喚り中河や摘月
椀鳳
柳化
璞齋

空一平の歌るは諸君子也

自由の心も芳保を結ん

心もあつる事らふ

空の葉や流ひきて着る衣初 東海林

慈父健く一耳所の歌は定
あつるを記ひして

舞ふ千代もあつるや竹の枝 男 二柳
耳ふ因一敏きや花とる成友 翠江
寺接ひ終ふ六十のその葉ころぬ 高 翠の
正月衣うゝあつる手残る 娘 いぬ

追加

聖一投 高智郭中 二月の如 寒葉舎
聊小多 高智 松見 鳥水

学 久保川 や 文撰

多 戸波 露底

香 赤丘 と 洒羅

多 田村山 霧 哉仙

静 是同坊 と 翠雨

如 以越り脚 月 翠雨

賀詠

十 二見菴 返 旭松 り 松 の 松

千 南松仙 代 龍葉 経 松 り 松

文音

大服 ミ り 松 先 松 又 松 初 松 り 松 や 松 春 松 の 松 又 松

幾子代の英名道一き
東海林松ニミク耳吹の聲よ
摺る墨も流く
筆をそぐて

ちりも交り

引くくまにせな

松二本

魯松葺

蕉門書林

皇都寺町通二條

橘屋治兵衛梓

